

【 特 別 企 画 】

国際文化交流は国際紛争根絶の手段か？

板場良久
(獨協大学)

1. 国際文化交流という異文化コミュニケーション

お決まりの国際文化交流イベントは、おおむね次のような展開で執り行われるようだ。まず、イベント会場には「異質なものを体験しよう」という人々が集合している。彼・彼女らは比較的生活にゆとりがあり、異文化体験にあてる時間的・金銭的余裕のある人たちが多い。会場には民族衣装を纏った「異質な人々」が登場し、豪華絢爛なパフォーマンスの披露が始まる。祖国や民族(または祖国という民族)の伝統文化を象徴するコスチューム。(もちろん衣装は現代素材を使って現代技術で加工されたものである場合がほとんどだが、そのことを指摘してはいけない。歴史の重みが失せてしまうからだ。)文化的に異質で非日常的なものに接することを期待して集まった人々は、一斉に注目する。「異質なものを眼差す目」という種類の「注目」だ。もし民族パフォーマンスがなんらかの事情で行われない場合には、伝統料理が人々に大盤振る舞いされる。人々が「おいしい」と言えば、異質な人々は喜び、「口に合わない」と言われても、それは食習慣の違いだから仕方がないと相互に納得し合って、集団的自衛権を友好的に発動すれば互いに傷つくこともない。いずれの場合でも 民族パフォーマンスであれエスニック料理であれ 異質なものを味わった人々は、こうした「異文化体験」の後、その歴史的背景の物語を聞かされるかもしれない。あるいは、事前に配布されたパンフレットから既に歴史的背景を学んでいるかもしれない。歴史を知ると、なぜか異質なものが理解可能なもの、意味のあるものに変換され、不安は安心に変わり、近づきやすいものになった気がするものだ。多少の緊張感は消えないまでも、異質な人々と対話してみようという気になる人も出始める。そのような気になった人々は、その後の懇親会で民族パフォーマーやエスニック料理人を褒め称える。そして、その賛辞に対して異質な人々も返礼したり、自文化を誇らしげに語ったりして、その場を楽しむのだ。

しかし、いざ対話が始まると、そこにはタブーも生じるので注意も必要だ。例えば、異質なものを披露した人々に向かって、「そんなの私にもできる」とか「私のほうが上手にできる」とか「その衣装のこの部分を変えたほうがいい」とか「このエスニック料理は改善の余地がある」とか、そのような越境的な発言をしてはならない。料理の材料や調理器具の生産地を細かく聞いて、「なんだ、エスニックなのは調理法と材料の組み合わせだけじゃないか」などと挑発してもいけない。たとえ冗談でも、冗談が通じないかもしれないからだ。また、民族パフォーマーたちに、そのパフォーマンスの起源について詰問することもタブーだ。詳細を知らないことが多いからだ。否、起源など実証できなくてもよいのだ。現在に受け継がれているというこの信念こそが、起源の存在のインデックスなのだ。この前提を問うてはならない。こうした「国際文化交流のタブー」を

侵さない心掛けが必要だ。なにしろここは友好的な異文化接触の場、国際親善の場である。一触即発の場でも、弁証法的な場でもない。多少の緊張感を持ったまま、理解できることだけを前面に出し、伝統の起源のように実証が困難で不可解で神話的に思えるようなことについては触れないことだ。詰問によって、そこに侵入しようとしてはならない。求められているのは詰問ではなく、深入りしない無難な対話である。それが異文化に対する敬意というものだ。タブーを侵さず適度な対話をするのがマナーである。

さて、こうした文化交流イベントも平穩無事に終盤戦を迎えるころ、エスニックな人たちは、この日までに発表準備を共にしてきた同胞たちとの文化的アイデンティティをより一層強固なものにしているだろう。そしてイベント終了後、自分たち同胞集団だけで打ち上げパーティーをすることもよくあることだ。そのとき、民族パフォーマンスの難易度と達成感によっては、本当によくやったことを互いに褒め称え合って、高揚した同族意識で感極まるかもしれない。しかし、それは自分たちの文化を異質な他者に向けて表象／代表するというパフォーマンスな行為を通じて文化の一員として自己確定しているだけではないのか、などと問うてはならない。そのような問い自体が文化交流の場においては異次元、失礼、非常識で、盛り上がっている場に水を差すものとみなされるかもしれないからだ。

以上は私の限られた実体験²⁾に基づいて、還元的、独断的、毒舌的、挑発的に、文化交流イベントのパターンを表現したものである。これ以外に文化交流のかたちがないとか、これ以外の筆致による素描が考えられないとか主張する意図はない。また、イベントへの参加者を嘲笑するつもりも毛頭ない。このように問いかけた企図は、文化がそこに所属する者のみを育むものであり、その所属者が育むものではないという構図を暴くこと、そしてそこに所属しない者は異質な対象として観照することのみが許されるのであって、やはりそこへ関与できないという掟があることを示唆することである。このような文化論に基く国際文化交流をいくら普及させたところで、異文化間の対立や国家間の紛争の根源を解消することにはならないのではないのか。なぜならこのような国際文化交流は実は文化本質主義の「効果」として立ち表れてきたのであり、この本質主義自体が対立の根本を構成するものだからだ³⁾。

2 . 国際文化交流における文化とコミュニケーション

国際文化交流の場においては、以上で示したような詰問はタブー視される。すなわち、異文化への介入は許されないし、自文化への介入も想定外だ。しかし、異文化間の対立の根本が文化の相違に起因するのであれば、そこへの介入なくして対立の根源的解消はありえないはずだ。それにもかわらず、国際文化交流は国際紛争を解消するという信望の基で普及されてきたのではないのか。私はこの推論を、文化とコミュニケーションの配置関係を規定する従来の語りを読むことによって導き出せるのではないかと考えている。

まず、文化とコミュニケーションの関係は何かと問われれば、それらは密接な相関関係にあると答えるであろう。なぜなら、文化はコミュニケーションの内容と授受の形式・方法を規定し、コミュニケーションは文化の存在と機能を可能にすると答えるのが従来の異文化コミュニケーション論において認可されているからだ。しかし、さらに問答を進めて、それでは異文化コミュニケーションとは何かという問いになると、途端に文化とコミュニケーションの相関関係は崩壊し、文化は一方的にコミュニケーションする人たちの背後（背景）に定位する　まるで背後霊が一

方的に人々にとり憑くかのごとく。そこでは文化はコミュニケーターに専ら影響を与えるものとなり、相関関係は因果関係にすり替わるのだ。実際、異文化コミュニケーションとは「文化的背景」の異なる人たちが行うコミュニケーションだと規定して、その定義問答に終止符を打とうとしてきた⁴⁾。

さて、このようなすり替えが起こった後の異文化コミュニケーション論の語りにおいて、文化を背後に置かれた私たちコミュニケーターは、もはやそれを正面から見るができない主体である。そして、そのような語りのなかでは、文化は常にコミュニケーターを背後から制御しようとするが、コミュニケーターに見返されたり書き換えられたりすることはなく、文化は常に安寧の位置に留まったままである。しかし、これは事実だろうか。むしろ、そこには、そうであってほしいという政治的欲望も同時に含意されていないだろうか⁵⁾。

ここで私は、文化を私たちにとり憑いた厄介なものとして、その存在を否認しようとするつもりはない。実際、私たちは文化という背後霊にとり憑かれているかもしれず、文化の影響を受けつつ語り合っているという点で、私たちは文化のメディアとして機能しているかもしれないのだ。(「メディア」という英語には「霊媒師」という意味もあるから、メディアである私たちが自文化にとり憑かれていると考えることも可能だ。)つまり、文化がコミュニケーターの主体を通じて語っているとも言えるのであり、その存在を否認するつもりはない⁶⁾。

むしろここで提起したいことは、私たちが自文化という背後霊にとり憑かれていても、せめて背後にいる存在と交信できないだろうか、そして交信可能な場合、伝統文化という先祖(伝来)の霊魂などをお払いすることなしに、文化の規定を超えて、否、文化と向き合い介入・関与しながら、文化を見直しつつ発言し行為する実践の自由(機会)を獲得できないだろうかという問いだ。これは、私たちは常に文化にとり憑かれ隷属的に支配・制御される存在でよいのだろうかという倫理的問いでもある。国際文化交流イベントの場合も、異文化は、その場を楽しませてくれる異質な人々の背後にとり憑いたままなのではないか。自分たちの文化的アイデンティティを保障してくれる代償として、自文化を背負ったままコミュニケーションに参加していないだろうか。そして、そのような負荷に耐えられるのは、個人レベルでは根無し草にならなくてもよいという安心感、国家レベルでは互いの背景文化の尊重が平和維持に寄与しているという共通感覚があるからなのではないか。

確かに、国際文化交流には、そのような側面があることが強調され、それゆえそのようなイベントはスポンサーを獲得し、様々なレベルで促進されてきた。ここで少し、国際文化交流に関するテキストを見ておきたい。

「各国大使館の大使、公使、参事官または在日文化人を招いて、その国の本当の姿を直接聞くという催し」を開催し、「多岐にわたって国際文化交流の活動を行なっている」という中條高德(日本国際青年文化協会会長)は、「平和な社会づくりは、異文化間の相互理解が基本である」と述べている⁷⁾。学術の世界でも、類似した発想は目立つ。例えば鈴木一郎は「国際交流」が「広義には、国際間の政治、経済、文化の人的、物的交流を意味するが、狭義には、特に国際文化交流を指す」とした上で、次のような還元的な解説をしている。

第一次世界大戦後、国際紛争は国家間の理解の欠如により生じたとして相互理解の必要性が強調され、国際連盟の次長となった新渡戸稲造が知的協力委員会(後の知的協力教会)を設

置し、国際理解のための文書の作成、人物交流、教師への国際理解教育等を推進し、各国もこれに応じて自国を外国に知らせるための国内組織を整備している。第二次世界大戦後、国際連合の成立と共に、知的交流のみならず、芸術、文化一般の交流を目的としてこの組織は改組され、ユネスコ（国連教育科学文化機関）となった⁸⁾。

中條と鈴木の記事に共通する思想は、「国の文化」という国民文化論の発想だけでない。ここで重要なのは、この両者の語りのなかに、互いの国の文化の理解の欠如が平和を脅かすという発想が共通してあることだ。さらに鈴木の場合には、国家間の相互理解と平和が因果関係にあるという強い認識が「第一次世界大戦後」に既にあったにもかかわらず、その認識が「第二次世界大戦後」に突如移行してしまっている。つまり第二次世界大戦が起こったことについては不問にしているのだ。

この論理の飛躍は新たな理解の手がかりになるのではないだろうか。すなわち、第一次世界大戦後に「強調され」ていた国家間の文化一般やその他の相互理解の大切さの認識は、第二次世界大戦を止めることができなかったということだ。すなわち、国際文化交流が平和をもたらすという因果律は成立しない可能性がある。むしろ鈴木の記事から読み取るべきことは、国際文化交流は「～大戦後」のような平時だからこそ促進されるし、だからこそその重要性も強調できるのではないかという推察である。国際紛争がない状況だから国際文化交流をする「ゆとり」があるのであって、それは国際文化交流が国際紛争の根源を解消する一助となるということと同義ではない。要するに、国際文化交流が欠如するから国際紛争の可能性が増すのではなく、国際紛争が欠如するから国際文化交流を促進できるのではないか。にもかかわらず、従来の語りにおける論法はその逆であった。そして「国際文化交流が平和や友好の生成・維持に寄与する」という従来の論法が有効であるためには、それにとって都合の悪い第二次世界大戦という事実について明言を避けるしかなかったとも読めるのである。

確かに従来の論法が示すように、私たちは国際文化交流で、異質な相手（の言行）を通じて、理性的ないし感性的に快楽を感じることがある。しかし快楽というものは、そもそも単独で存在する自律的なものではなく、常にその他者としての不快の可能性も秘めている。〈快～不快〉というスペクトルごとに取り込んでいると言ってもよい。異文化体験の快楽がいかに瞬時に覚える感覚だとしても、それは判断に他ならない⁹⁾。これは異文化理解からくる安心についても同様のことが言える。常に〈安心～不安〉というスペクトルに依拠して安心は存在する。不安の可能性が同居していなければ、そもそも安心なるものは存在しえない。このように、異文化体験を通じて快楽や安心がもたらされると言うことは、その異文化間関係に不快や不安が存在しないのではなく、むしろ蟄居していると考えべきだ。従って、安心が不安に、快楽が不快に移行することがあっても不思議ではない。理解が安心をもたらすというのは一元的かつナイーブな発想だ。また同時に、あることで快楽や安心がもたらされても、それとは別の理由で不快や不安がもたらされることもある。前者は後者を不在にするという単純な因果関係が成立しなくても不思議ではないし、前者と後者が排他的関係にあるというわけでもない。従って、残念なことに、好感をもたらす交流を促進しても、不快や不安や嫌悪の根源が解消される保障は全くないのだ。むしろ、自他間の異質性が強調されればされるほど、対立の根源は温存されたままになるのではないか。

さてここで、文化とコミュニケーションの関係に話を戻そう。異なった文化が人々の背景にあ

り、それが異質な人たちを媒介している状態で相互に関わり合うのが国際文化交流なのであれば、国際文化交流が国際平和の原因として機能することはないのではないか。異文化が異文化コミュニケーションたちの背後にあるという思考枠では、異質な相手の文化を対象として観照することはできても、その文化に介入することは難しいのではないか。各々の文化の最前線には自文化を表象／代表（保守）している人間がいるという構図になっているからだ。そして、様々なレベルの異文化交流において、望ましくない感覚（異質なものへの嫌悪など）が表面化した場合、従来の因果律的な語りの論法を適用すると、その原因は異質な人々の背後にある異文化となる。しかし、この背後にあるものは、その面前で対置する異文化を表象／代表する人たちによる介入が困難なものとなっている。（しばしば聞かれる「外人にはわからない」や「それは内政干渉だ」がその例だ。）従って、異質な文化に介入するよりも先に、その前線に立ちはだかる異質な人間が嫌悪などの矛先となりうる。生身の人間が背後の文化よりも先に傷つく対象となるのだ。実際、対立（戦争）へと進む状況では、このようなことが起こってきたのではないか。

要するに問題は、国際文化交流が異文化理解を促進し友好感情を双方にもたらすかどうかではなく、それが対立の根源を解消するかどうかである。従来の異文化コミュニケーション論では、国際文化交流が平和に寄与するというようになっていた。なぜなら、それは「国際間の理解欠如」を補う手段であり、快樂的イベントなどを通じて異なる「文化的背景」を体験・認識すれば異質なものに対する理解や安心感や敬意も増幅すると論じられてきたからである。しかし、異文化が相手の背後にある限り、理解した異質な背景文化へ関与できない。換言すれば、理解で留めておけというのである。それ以上はタブーである。集団文化の意味的慣行に対してそこに所属しない外部者が関与してはならない。あくまで外部者として異文化を眺め（味わって）いることが肝要だという論法なのである。そして本人も自らの背後にある自文化を、介入可能なものとしては直視できないという構図なのだ。

ところでこの論法をどこかで聞いたことはないか。そうだ、これは文化相対論である。「文化的背景」という概念。自文化という背後霊。この霊はまさに文化相対主義の効果として異文化コミュニケーションの背後にとり憑いたものだ。確かに相手にとり憑いた背後霊と交霊する必要のない場合も多くあるだろう。けれども、異文化間の対立というのは、異質な相手の背後霊に悩まされているときにこそ起こっていることなのではないか。とり憑いた背後霊は、背後にとり憑かれた相手本人よりも、それを見ているこちら側を睨んでいる場合が多いのではないか。不可解な存在として、こちら側を恐れさせるような眼差しで、こちら側の不安感を増幅させるような様相で。これまでの戦争もそのような形で起こったのではなかったか。つかみどころのない背後霊を捕らえることができないため、それがとり憑いている人たちを抹殺することで、不安と対立を解消しようとしてこなかったか。異文化への不可侵を推奨する文化相対主義の歯止めがきかなくなって、ついには暴力的に介入したのではなかったか。霊にとり憑かれた生身の人間を殺すのではなく、背後霊たちに変身してもらうよう交渉できないものか。これこそが異文化コミュニケーションの倫理なのではないか。

3 . 問題提起

従来の異文化コミュニケーション論の語りのなかでは、文化とコミュニケーションは相関関係ではなく、実は因果関係だったのではないか。その語りのなかでは、異質な人たちの背後にそれ

ぞれの文化があり、異質な相手を通じて異文化に対象として触れることはできたが、それに相手と共に関与し、必要があればそれを書き換える努力をする実践的可能性については想定されていなかったのではないか¹⁰⁾。文化を背負った本人もそれと正面から向き合えなかった。このような因果律の語りのなかでは、本人も自文化に背後から制御されていることになっていたため、前向きに文化へ働きかけることができない不自由な主体にされていたのではないか。

しばしば文化相対主義は、国粹主義や帝国主義とも通底する自民族中心主義への反省から生じたと言われる¹¹⁾。しかし実は、文化相対主義は自民族中心主義が発芽する前段階として機能してきたと言えるのではないか。(これは時系列的にそうではないという反論が可能である。しかし、例えば R. ベネディクトの発想が戦前になかったわけではないし、彼女自身も意味的慣行に優劣をつけることを自ら実践してきたことが『菊と刀』から看取できるため、どちらが先かという判断は意味がない。)そして文化相対主義で耐えられなくなった時点でそれまで温存されていた自民族中心主義が噴出するというかたちをとるのではないか。文化相対主義は自民族中心主義を解消させるどころか、むしろ覆い隠していただけなのではないか。否、もう一步、挑発的に踏み込んでみたい。すなわち、自民族中心主義は文化相対主義の1つの表れ方なのではないか。文化相対主義による文化的自他の区別の慣行が、状況によって優劣比較行為に転じ、ある文化集団が別の集団との力関係の再配置へ向けて動き出したとき、文化相対主義は自民族中心主義へと変形し、異文化の人間集団への力任せの介入が始まるというのが国内でも国家間でも実際に起こった対立のパターンではなかったか。

そのように考えると、文化相対主義に基いた国際文化交流が平和をもたらすことなどありえないのではないか。むしろ平和が国際文化交流の大前提なのではないか¹²⁾。戦争のように暴力的な紛争解決手段が選択されることの原因は、互いの文化への理解と敬意の欠如ではなく、異質なものへの恐怖なのではないか。異質なものへの恐怖は、異質なものを理解すればするほど緩和されるとは限らない。その逆に理解すればするほど、恐怖が増大することもあるのではないか。理解すればするほど、相手の敵意がはっきりすることもあるのではないか。たとえそれぞれの人間個人は「いい人たち」であると認識していても、とり憑いている背後霊(文化)の敵意が理解できればするほど、恐怖解消の手段は前線に出ている人間個人で構成される敵軍を破滅させることしか思いつかなかったのではないか。背後霊と直談判することは考えられなかったのではないか。私たちは、この「背景にあるもの」をもっと前景化させ、それに関与し、それと交渉し、それを書き換えていく実践の可能性を探ってもいいのではないか。これはまだ試論の域を出ないが、今後の課題として提示しておきたい。

註

- 1) もちろん「ゆとり」のない学校関係者(学者や学生)が文化交流に参加することはよくあるが、そもそも学校教育自体が「ゆとり」以外の何物でもないことは、「スクール」や「スカラー」の語源である「スコラ」が「余裕」を表す語であったことから推察できる。
- 2) ここまでの描写は、とくに客員研究員として米国ラトガーズ大学に滞在した2004年9月から2005年9月までの1年間に参加した十数回の異文化交流イベントを再想起しながら書いた部分が多い。
- 3) 諸々の国民文化論に通底する文化本質主義の危険性については多くの文献があるが、ここでは酒井直樹他編『ナショナリティの脱構築』(柏書房、1996)を推奨する。
- 4) このような「記述」については、例えば石井敏他編『異文化コミュニケーション・ハンドブック』(有斐閣、1997)の「第1部・入門編 異文化コミュニケーションとは何か」を参照せよ。

- 5) 「コミュニケーターの文化的背景」というような言表が本当に記述的 (descriptive) かどうかは疑問だ。なぜなら、この場合、「～である」という記述言表から「～べきである」という前提を導き出す倫理的アプローチを適用できるためである。このような倫理的読みについては、加藤尚武『現代倫理学入門』の「7. <...>である>から<.....べきである>を導き出す」を参照せよ。
- 6) 「主体はいわば、言説、法、文化によって、話されるものである」。E. グロス (櫻村愛子訳)「主体」『フェミニズムと精神分析事典』E. ライト編 (多賀出版、2002) 146 頁。
- 7) 「敗戦の挫折を人生の原点に」『中外日報』(2004年2月21日)。傍点は引用者がつけた。なお「その国の本当の姿」というものが措定されていることから、ナショナルな文化本質主義を看破できる。
- 8) 「国際交流」『異文化コミュニケーション・ハンドブック』(有斐閣、1997年) 238 頁。傍点は引用者がつけた。
- 9) そのような感覚が判断ではなく自然発生的なものだとする人間主義的立場は、反人間主義の登場によって、既に葬り去られているようだ。たとえ異文化体験の快楽や安心が自発的・自然発生的に経験されたとしても、それは所詮、そのように感じるように条件づけられていると見るのが、反人間主義の見地からすると妥当である。このような反人間主義的諸言説のなかで「主体」というものも論じられている。この現代思想についての概説としてグロス (前掲) を参照せよ。
- 10) ここでは文化を、所与の時空間の習慣や儀礼や文化財や芸術作品などに書き込まれた意味的慣行という意味合いで使っている。書き込まれたものを書き換える実践的可能性も想定しつつ。
- 11) この時系列的変遷という言説については私自身もその再生産に加担してきたことを反省している。小池生夫他編『応用言語学事典』(研究社、2003)の「文化相対主義」の項目解説を参照せよ。
- 12) 本稿執筆中にも、このことを示唆する事象が起こっている。竹島 (独島) 問題に端を発する高校生の韓国派遣計画の延期である。例えば、『読売新聞』(2005年3月21日)を参照せよ。